

ICTの活用を通じた英語パフォーマンスと学習意欲の向上

所属コース 教科領域コース
氏名 武田慶子
指導教員 池野修 山本浅幸

【概要】

本研究は、タブレット端末を用いたパフォーマンス課題の授業実践を行い、2回のパフォーマンス課題の評価とICTの活用を通じた学習意欲の向上について、その変化を調査することを目的としている。授業ではプログラム・システム・アプリ（ロイロノート・スクール：以下ロイロノート）を活用して生徒に自分のパフォーマンスを録画したものを視聴させ、自分自身の課題を明確にさせた。また、教師やペアの相手からのアドバイスや励ましを受けることが、学習意欲の向上に繋がるための有効な手段であるか検証した。アンケートとパフォーマンステストの結果から、録画機能の有用性が生徒に実感され、ペアによるアドバイス活動が意欲を向上させたことが明らかになった。

【キーワード】 中学校英語 パフォーマンス課題 ルーブリック 学習意欲
ロイロノート

I はじめに

令和3年7月末の時点で、全国の公立中学校等の96.5%が「全学年」または「一部の学年」でICT端末の利活用を開始した（文部科学省初等中等教育局修学支援・教材課，2021）。本研究を行った研究協力校においても日々の授業でタブレット端末を使用しており、GIGAスクール構想の実現が感じられる。

先行研究調査として、タブレット端末及び学習意欲に関する96の論文を調査したところ、その内容は「学習意欲の向上」「授業改善」「個に応じた指導」の三つに大別された。最も多かったのは「学習意欲の向上」に主軸を置いて書かれたもので全体の58%を占めており、次に多かったものは「授業改善」について書かれたもので全体の21%を占めている。その他として、特別支援教育や個に応じた学習指導の実践について書かれたものがあった。

GIGAスクール構想の実現や中学校における新学習指導要領の完全実施など、教育環境が大きく変わろうとしている今、学習意欲の向上を目指したICTの効果的な活用が求められる。文部科学省は『学びのイノベーション事業実証研究報告書』（2014）において学習場面に応じたICT活用事例を挙げており、本研究ではその中の「思考を深める学習（B3）」を基に、学習意欲の向上を目指して研究実践に取り組むこととした。

II 研究の目的

中学校では、2021年度から新学習指導要領が全面実施され、学習評価においては「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点での評価が行われている。中央教育審議会答申（平成28年12月）では「主体的に学習に取り組む態度」に関する重要な点として「子どもたちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断したりしようとしているかどうかとい

う意志的な側面」を挙げている。本研究ではパフォーマンス課題に取り組ませる前に学習指導要領の3観点に即したルーブリックを生徒に提示し、国立教育政策研究所（2020, p. 81）で示されている指導手順を基に身に付けさせたい力を示すことで、学習に関する自己調整を促すことができると考える。

パフォーマンス課題に取り組ませる際、生徒はタブレット端末の録画機能を用いて自分のパフォーマンスを確認したり、ペアの相手からアドバイスを受けたりする。改善点が明確になることで生徒はより意欲的にパフォーマンスの練習に取り組み、教師やペアの相手からのアドバイスや励ましを受けて学習意欲が向上すると考え、本実践に取り組んだ。

Ⅲ 授業実践

(1) 授業実施時期・授業展開

10月21日に“All about Me”, 12月2日に“My Hero”の授業を行った。対象はA中学校1年生3クラス（109名）で、使用教科書はNEW HORIZON English Course 1（東京書籍）である。“All about Me”では自分の好きなことなどについて、分かりやすく伝えること、“My Hero”では好きな有名人やあこがれの人について、分かりやすく伝えることをねらいとした。授業ではタブレット端末の録画機能を用いて自分のパフォーマンスを確認し、教師やペアの相手からアドバイスを受ける場面を設定した。

表1 授業展開

学習活動（分）	◇指導上の留意点 ◎評価（評価方法）
1 あいさつ（2） ＜一斉＞	◇英語であいさつをすることで、英語の授業に対する意欲を高めさせる。
2 復習（5） ＜全体＞	◇本文を読むことで、本時の活動内容に対するイメージを具体的に持たせる。
3 本時のめあての確認（3） ＜一斉＞	
4 練習（20） ＜個人→ペア→個人＞ ＜全体＞ ＜個人＞	◇本時で使用するルーブリック（評価規準）について理解する。 ◇ペアの相手からのアドバイスを意識して練習させる。 ◎情報を整理してつながりのある文章で伝えているか。 （観察・ロイロノートの動画） ◎アドバイスを意識して練習を重ねているか。（観察） ◎録画した動画をもとに、自分の発表を改善しようとしているか。 （観察）
<ul style="list-style-type: none"> ・最初に撮った動画を残しておく。（ロイロノート） ・ペアに自分の発表を聞いてもらい、良いところとアドバイスを伝えてもらう。 ・アドバイスをもとに、練習を重ねる。 ・全体の場で発表をする。（4～5名程度） ・3分間で、最も良いと思う発表動画をデータで提出する。（ロイロノート） 	
5 発表（10） ＜全体＞	◇全体の場での発表に対して評価し、自信を付けさせる。
6 授業の振り返り（7） ＜個人＞	◇最初の動画と提出した動画を比べて、生徒自身に成長を感じさせる。 ◎自分の発表の良くなった点を認識できたか。（ワークシートの記述）
7 あいさつ（3） ＜一斉＞	

(2) I C Tを活用した指導の工夫

研究協力校であるA中学校英語科では、普段からロイロノートで音読したデータを提出させており、生徒はタブレット端末の使用に慣れている。

“All about Me”では自分自身のことについて、“My Hero”では好きな有名人やあこがれの人などについてパフォーマンスを録画させてテストを実施した。相手に話しかけるような実際のスピーチに近い状況を感じさせるため、生徒同士で録画をさせた。全体での練習の様子から、授業者として「相手意識を持って、話すスピードに意識すること」「分かりやすくするためにジェスチャーを入れること」の2点をアドバイスした。図1で示すループリックと併せて、より伝わりやすいパフォーマンスについて考えさせた。

また、授業者は生徒の学習意欲を高めることをねらいとして、練習中の生徒全員にアドバイスをするように意識した。このアドバイスについては、授業者以外の授業参観者にも協力を依頼した。授業の最後に録画したベストパフォーマンスをデータで提出させ、教師が評価を行った。

(3) ペアによるアドバイス

西岡(2016, p. 97)に基づき、ペアで録画をした後互いにアドバイスをを行い、改善点を確認して練習をさせた。他者から褒められることが自信になり学習意欲が向上すると考え、ペアでのアドバイスの際には「相手がやる気になるように、伝え方にも気を配る」ことを心掛けさせた。例えば「声が小さい」ことを相手に伝えたい場合、「内容がとても分かりやすく良いので、自信を持って声を出すと、もっと良いパフォーマンスになる」など、良いところを伝えてからアドバイスをしよう具体例を挙げて説明をした。

(4) 評価について

本多(2020, p. 101)を参考に作成した以下のループリックを、パフォーマンスの練習を始める前に生徒に提示した。

1 知識・技能 (現代の標準的な発音、語や句、文における基本的な区切り、文における基本的な強勢、文法で話す技術を身に付けている。)	
A	正しい発音、強勢、区切り、イントネーション、文法で話している。
B	ほぼ正しい発音、強勢、区切り、イントネーション、文法で話していて、誤りは1~2個程度である。
C	ほぼ正しい発音、強勢、区切り、イントネーション、文法で話していて、誤りは3~4個程度である。
D	発音、強勢、区切り、イントネーション、文法の誤りが5個以上あり、相手に伝えるという点で支障がある。
2 思考・判断・表現 (自分の好きな有名人やあこがれの人について整理し、まとまりのある内容を話している。相手に分かりやすいように、話すスピードが適切である。)	
A	自分の好きな有名人やあこがれの人について、話すスピードを意識しながら聞き手に分かりやすいように工夫し、整理して述べている。
B	自分の好きな有名人やあこがれの人について、話すスピードを意識しながら聞き手に分かりやすいように整理して述べている。
C	自分の好きな有名人やあこがれの人について、話すスピードを意識しながら聞き手に分かりやすいように述べている。
D	自分の好きな有名人やあこがれの人について、聞き手に分かりにくい内容である。
3 主体的に学習に取り組む態度 (自自分の好きな有名人やあこがれの人について、まとまりのある内容を話そうとしている。)	
A	情報量が多く、聞き手に分かりやすいようにジェスチャーを用いて伝えようとしている。
B	情報量が比較的多く、聞き手に分かりやすいようにジェスチャーを用いて伝えようとしている。
C	情報量は適切であり、聞き手に分かりやすいようにジェスチャーを用いて伝えようとしている。
D	情報量が少ない、あるいは時間内に終えることができなかった。

図1 パフォーマンステストで用いたループリック

知識・技能では「発音と文法の正確さ」、思考・判断・表現では「分かりやすい伝え方」、主体的に学習に取り組む態度では「情報量」をそれぞれのキーワードとして提示しながら説明した。

録画したパフォーマンスは、2名の評価者が以下の手順で評価を行った。

- ア 10名の生徒（全体の約1割）を抽出
- イ ルーブリック評価の詳細についての確認
- ウ 評価者A・評価者Bによる評価（別室）
- エ 各評価者による評価の確認

2名の評価者の評価が一致したのは“*All about Me*”が90%，“*My Hero*”が93%であった。一致率が90%を超えていることを確認した上で、授業者が残りの生徒の評価を行った。

IV 実践の成果と課題

(1) アドバイスについて

実践を評価するデータを収集するねらいで、ICTを用いた指導の工夫や学習意欲に関するアンケートを実施し、ICTを用いた指導の工夫では第1回は99名、第2回は102名、学習意欲に関するアンケートでは第1回は91名、第2回では90名が回答した。4件法及び5件法の質問を全部で9項目実施した。また、第1回と第2回のパフォーマンステストの結果も、実践を評価するための情報とした。

「授業中に友達から自分の発表の良いところを伝えられて、英語の学習に対する意欲が高まりましたか。」という問いに対して「4 そう思う」「3 どちらかと言えばそう思う」「2 どちらかと言えばそう思わない」「1 そう思わない」「0 良いところを伝えられていない」の5件法で質問した。調査結果は図2に示す。第1回・第2回の調査結果において、共に「4 そう思う」「3 どちらかと言えばそう思う」と肯定的な回答をした生徒の合計が8割を超えている。このことから、ペアの相手から良いところを伝えられることで学習意欲が向上することが確認できた。

しかし、教師からのアドバイスは、ペアの相手からのアドバイスと比べて効果が比較的低い結果となった（図3）。先生から「良いところを伝えられていない」と回答した生徒は1回目で19.1%、2回目で18.4%だった。

「英語らしく発音できているね。」「ジェスチャーを付けているね。」など、表面的なアドバイスしか与えられなかった生徒も多くいた。教員も授業中は生徒に十分に声を掛けることができなかつたため、評価シートに教師からのコメントを書いて返却した。

(2) ロイロノートの活用について

録画機能を用いて自分のパフォーマンスを振り返ることで、自分自身の課題が明確になり、生徒の学習意欲が向上するであろうという仮説を立てて実践に取り組んだ。「録画機能を利用して自分の発表を振り返ることで、自分の発表の良くなった点がありましたか。」という問いに対して、図4が示すように、2回の調査のいずれも9割を超える生徒が肯定的な回答をした。

図5が示すように「録画機能を利用して自分の発表を振り返ることで、英語のパフォーマンステストに対する意欲が高まりましたか。」という問いに対して約9割の生徒が肯定的な回答をした。しかし、第1回から第2回の結果を比較すると全体として英語のパフォーマンステストに対する意欲は低下している。図6が示す「録画機能を利用した学習を通して、英

語の学習に対する意欲が高まりましたか。」という問いについても、ほぼ同様の結果となった。

このことから、録画機能について、全体として生徒自身は自分のパフォーマンスを改善する効果を認識しながらも、パフォーマンステストや英語の学習に対する意欲を保持することは難しいことが分かった。意欲を保持するために、ICTの活用に加えて、ペアワークやグループワークなどの他者との関わりを持たせるなどの工夫が必要である。

「録画機能を利用して自分の発表を振り返ることで、英語のパフォーマンステストに対する意欲が高まりましたか。」という問いに対して(1 そう思わない)と回答した理由について、生徒に聞き取り調査を実施した。その内容については以下に示す通りである。

- タブレット端末を利用することは、友達とやりとりをしているわけではない。
- 機械のトラブルでうまくいかないときがあった。
- ロイロノートが使いにくい。

「録画機能を利用した学習活動を通して、英語の学習に対する意欲が高まりましたか。」という問いに対して(1 そう思わない)と回答した理由について、生徒から聞き取った内容は以下に示す通りである。

- パソコンの扱いは難しい。
- すぐに言葉が詰まってしまう。

この2つの問いに対して(1 そう思わない)と回答した生徒は、タブレット端末の使い方に慣れると評価が変わる可能性がある。タブレット端末の使い方について、繰り返し使用する、トラブルが起きた際に迅速に対応するなどして、学習意欲の向上が期待できると感じた。

(3) 学習意欲の向上

「英語の授業中、粘り強く学習に取り組んでいますか。(図7)」「家庭で、英語の学習に意欲的に取り組んでいますか。(図8)」「英語を勉強することは楽しいですか。(図9)」「英語を勉強することに興味がありますか。(図10)」という問いに対する回答結果について、指導前と指導後とは全体として肯定的な回答をした生徒の割合が増えている。ICTの活用に加えて他者からのアドバイスを受ける活動を繰り返すことで、生徒の学習意欲が向上することが推察できる結果となった。

以下は、2回の授業を終えた生徒が、ロイロノートに記入した学習意欲に関することが述べられている感想である。特に男子生徒Cの感想では、自らの学習を調整しようとしていることが推察できる。

- 「自分の映像があるのとなないのでは、意欲にも違いが出るし、自分の成長も感じられるのでいい。」(男子生徒A)
- 「私は授業で積極的に発表するほうではありません。でも、ロイロノートを使うことで発表することができ、楽しかったです。これからもロイロノートを活用した授業をして、いつかは自信をもって授業で発表できるようになりたいです。」(女子生徒B)
- 「自分がしているところを見ることによっていいところや悪いところが分かって、次の取り組み方が変わるのでいいと思いました。」(男子生徒C)

(4) パフォーマンステスト

生徒には、発表原稿(図12)をなるべく見ないようにスピーチを行うように指示した。複数回撮り直しをすることができる状況を作ったことで、自分の動画を確認しながらより良いパフォーマンスを目指そうとする生徒の姿が見られた。

2回のパフォーマンステストの結果を比べると、3観点ともより高い評価を取る生徒が増えた。特に「思考・判断・表現」でA評価を得た生徒が25.3%から89.3%へと大幅に増えている。どの観点についても、1回目の授業で他者の発表を聞いて自分の発表と比較し、よいところを取り入れようとしたことが推察される。1回目よりも2回目の課題の方がパフォーマンスを行う上では難しいテーマであったにもかかわらず、全体としての評価が向上したことは成果として捉えることができる。しかし、本研究では約2か月半の間に2回の授業実践を行っただけである。生徒のパフォーマンスが向上したのは、普段の授業における指導の成果であると考えられる。

V おわりに

本研究で行ったアンケート結果の分析から、生徒はICTの学習活動における効果を認識しているが、ICTの活用だけでは生徒の学習意欲を保持するのが難しいことが分かった。ICTの活用は必要不可欠ではあるが、ICTの活用に頼りきりだけの授業は、生徒の学力向上に繋がりにくいことが推察される。今までと同様にコミュニケーションを重視した授業を大切にしながら、タブレット端末などのICTを活用する「ベストミックス」の授業を目指すことが重要であると考えられる。そのためには、タブレット端末を活用した反転学習など生徒の学習意欲の向上を目指したICTの可能性を模索し、フィードバックを適宜行うことが必要である。生徒にコミュニケーションを図る楽しさを味わわせながら学習意欲を高める授業について、今後も研究に取り組み続けたい。

引用・参考文献

- 国立教育政策研究所(2020).「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
東洋館出版社
- 西岡加名恵(2016). 資質・能力を育てるパフォーマンス評価 明治図書出版
- 本多敏幸(2020). 新3観点の学習評価完全ガイドブック 明治図書出版
- 文部科学省(2014). ICTを活用した指導方法
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/14/1408183_4.pdf (最終アクセス日 2021年12月20日)
- 文部科学省初等中等教育局修学支援・教材課(2021). 端末利活用状況等の実態調査(令和3年7月末時点確定値)
https://www.mext.go.jp/content/20210830-mxt_jogai01-000009827_10.pdf (最終アクセス日 2021年12月18日)

謝辞

本研究に御協力いただいたA中学校1年生の生徒の皆さん及び教職員の皆様、特にいつもの確かなアドバイスをいただいた英語科主任の和家加奈先生には大変お世話になりました。また、本研究を進めるにあたり、愛媛大学教育学部の池野修先生、山本浅幸先生及び両研究室の皆様には丁寧な御指導・御助言をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

資料

1回目：10月21日実施 2回目：12月2日実施

「授業中に友達から自分の発表の良いところを伝えられて、英語の学習に対する意欲が高まりましたか。」

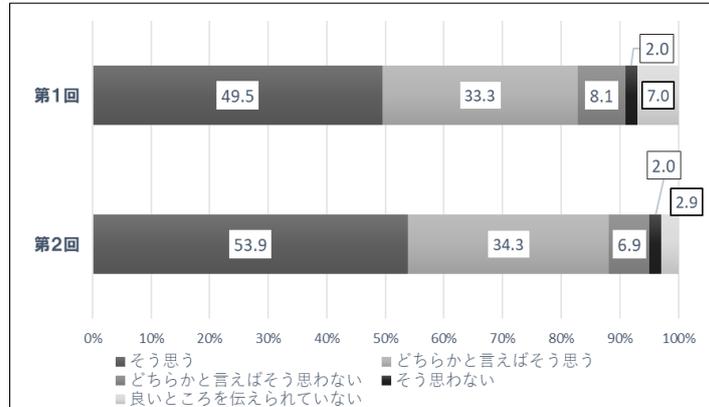


図2 ペアの相手からのフィードバックによる学習意欲について

「授業中に先生から自分の発表の良いところを伝えられて、英語の学習に対する意欲が高まりましたか。」

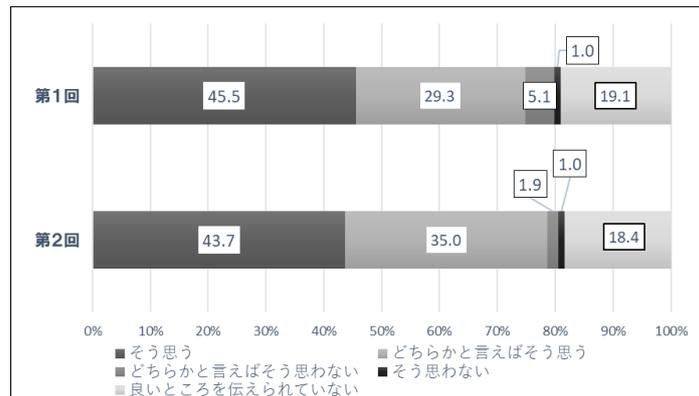


図3 教師からのフィードバックによる学習意欲について

「録画機能を利用して自分の発表を振り返ることで、自分の発表の良くなった点がありましたか。」

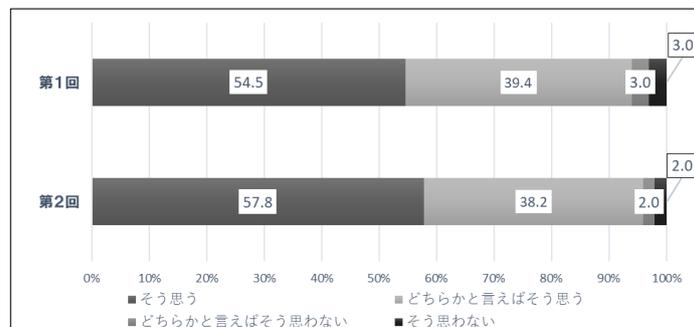


図4 録画機能の効果について

「録画機能を利用して自分の発表を振り返ることで、英語のパフォーマンステストに対する意欲が高まりましたか。」

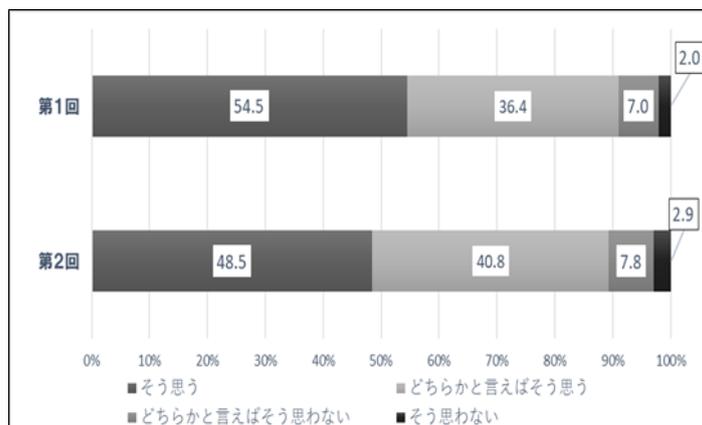


図5 録画機能活用後のパフォーマンステストに対する意欲について

「録画機能を利用した学習活動を通して、英語の学習に対する意欲が高まりましたか。」

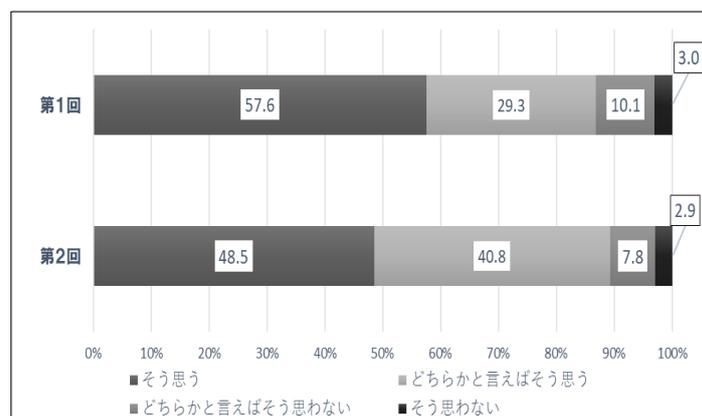


図6 録画機能活用後の英語学習に対する意欲について

「英語の授業中、粘り強く学習に取り組んでいますか。」

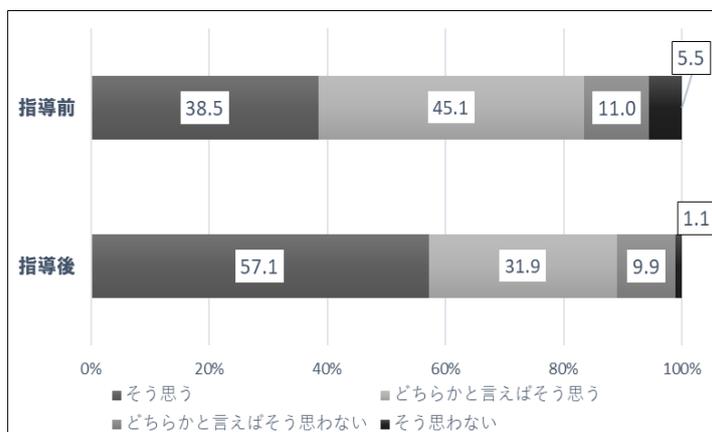


図7 英語の授業における学習意欲について

「家庭で、英語の学習に意欲的に取り組んでいますか。」

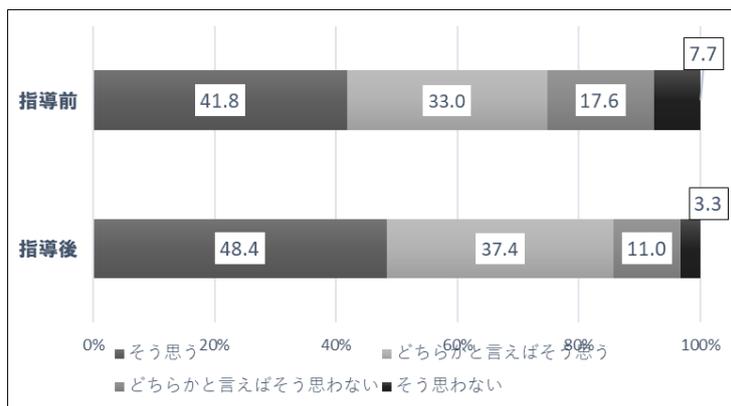


図 8 家庭学習における英語の学習意欲について

「英語を勉強することは楽しいですか。」

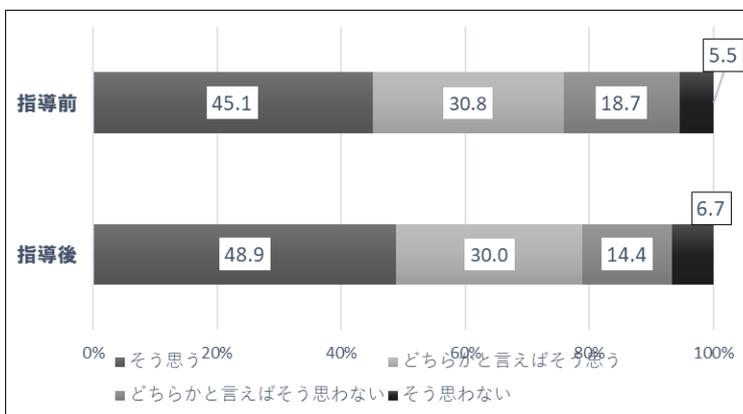


図 9 英語の学習に対する意識調査 (1)

「英語を勉強することに興味がありますか。」

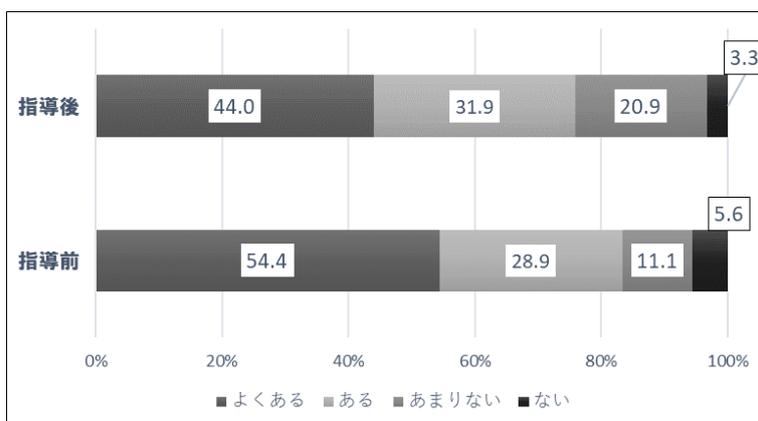


図 10 英語の学習に対する意識調査 (2)

「パフォーマンステストの結果」

① 10月21日実施 ② 12月2日実施

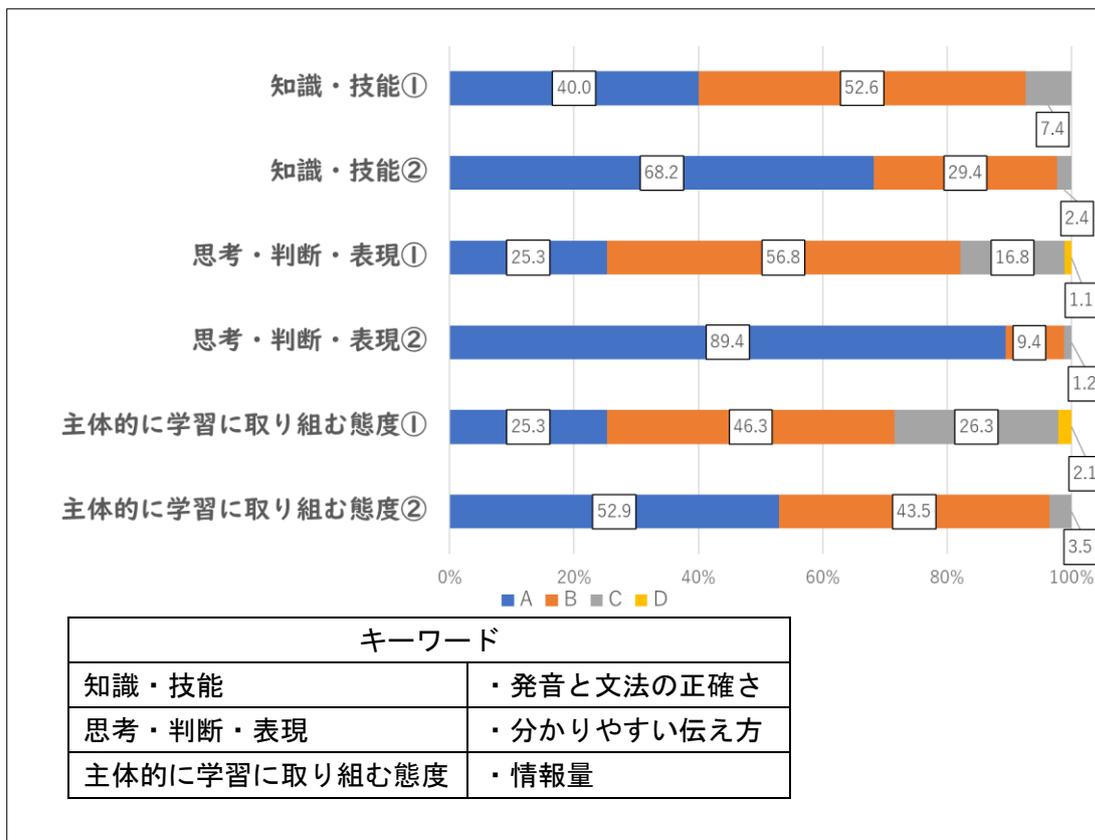


図11 パフォーマンステストの結果

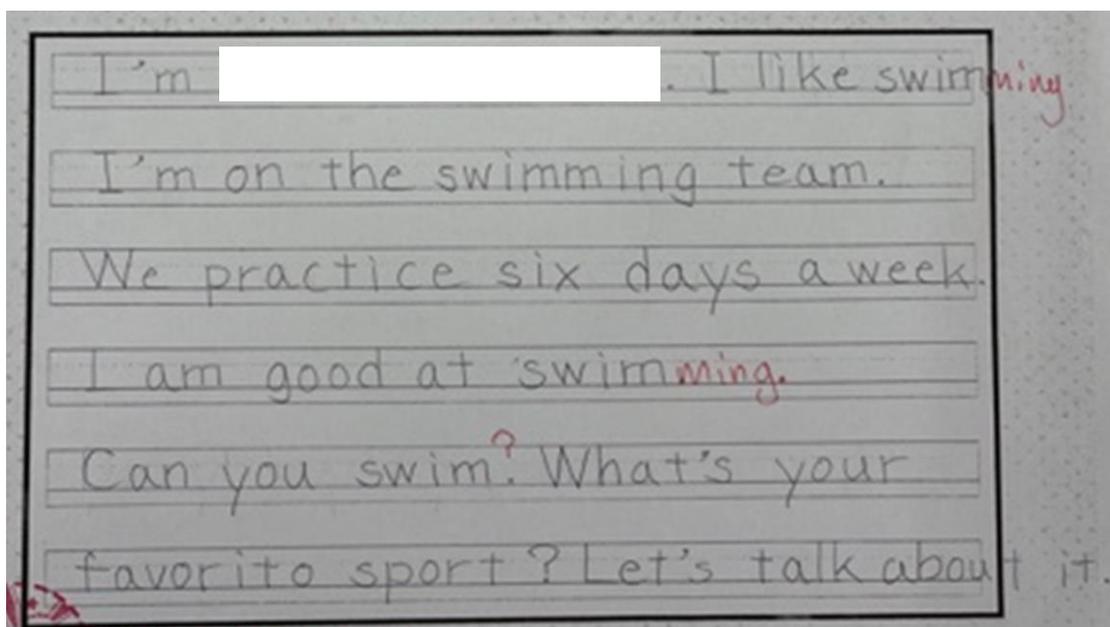


図12 生徒発表原稿(ALTによる添削後)